潮木守一 『キャンパスの生態誌』中公新書 S61.11

学生は遊びたがり、教師は教えたがる

われわれはこれまでさまざまなキャンパスをめぐり歩いてきた。おそらくそこにはさまざまな教師、学生の姿をみいだしたことであろう。大学教師といい、大学生といっても、けっして一つのものだったわけではない。つまり大学とは、いまでいっても、その内側はさまざまである。中世から始まる大学の歴史は古いが、それは時代を越えてつねに同じ姿のままであったわけではない。つまりわれわれはとかく「大学」という名前にまどわされ、昔から今日までずっと同じだったと思い込みがちであるが、それは間違いである。

それではいったい「大学」と名づけられた場では、どのようなことが行われてきたのであろうか。また現在どんなことが行われているのであろうか。まずこの本の冒頭で述べたように、大学とは若者の揺れまどう場である。青年期とは人生の中でもっともエネルギーの高まった時期である。その余りあるエネルギーをさまざまな形で発散させたがるものである。喫煙、口論、授業妨害、反抗、バカ騒ぎ、アルコール、暴飲暴食、ストライキ、ボイコット、切腹、恋愛、悪ふざけ、放浪、何でもやってみたい年頃である。

ところが大学側は、この野放図な青春のエネルギーに何らかの統制を加え、彼らの生活を秩序立て、自制心を植えつけ、一人前の大人に育きあげようとする。それにはどうしたらよいのだろうか。大学とはまがりなりにも「学問の場」、勉強の場」である。あふれんばかりの青年のエネルギーを統制するといっても、労働かスポーツを通じてではなく、勉強を通じて、それを統制するのだとすれば、大学にはならない。つまりエネルギーあふれる若者を集め、学問に熱中させる形で彼らのエネルギーを「水路づける」ことが、大学には求められている。

しかし考えてみるならば、この仕事はそれほど簡単な仕事ではない。エネルギーあふれる若者がいつでも勉強に関心を抱き、その中に進んで没頭していくわけではない。むしろ勉強などというこは、彼らにとってうっとうしいものでしかない。貴重な青春を過ごすのであれば、勉強以外にもっと面白いことはいくらでもある。かくして学生は遊びたがり、教師は教えたがる。大学という舞台の上でいかに多くの悲劇、喜劇がくりかえされてきたか、いかに教師と学生が対立、抗争をくりかえしてきたか。その跡はすべてこうした点にある。

自動車学校型

まず最初にとりあげるのは「自動車学校型」とでもいうべきタイプである。この「自動車学校」の典型的な姿は、第2章に述べた開拓期日本の帝国大学に典型的に見られる。また第1章に紹介した「九世紀のアメリカのカレッジ」にも、その一端が示されている。それではこの「自動車学校」の特徴はどういう点にあるだろうか。

「自動車学校」の目的はともかくある一定の知識を学生に詰め込み、そうした知識の習得に学生のエネルギーを費いはたしてしまうことにある。試験につぐ試験を課し、あるいは講義ノートの筆写、その暗誦に学生のエネルギーを吸収してしまおうというのである。そこでの教師とはまさに一種の「調教師」だといってもよい。まるで調教師が動物の芸をしこむように、徹底的に学生を絞り尽げ、与えた教科書とか、教師の講義する講義ノートを暗記させ、

はどんどん暗記させ、卒業も認めないという方式である。ただ暗記させるだけでは効果がないというのであれば、毎学期ごとに成績を査定したり、卒業学次を定め、それを天下に公表したり、「競時計」のような装置をあたりするのも、一つの方法であろう。このようにして学生を成績目指してのラットレースに引きずり込んでしまうことが、この「自動車学校」のねらいだった。そうすれば学生は「真面目に」勉強するようになるだろう。あまり野放図な学生生活ばかり追っているわけにもいかなくなることであろう。青年のエネルギーの統制の しかたとしては、かなり有効な方法だったことは確かである。

さらにその上、こうした「自動車学校」の成績が、卒業後の就職を左右することにでもなれば、学生はもっと「真面目に」勉強に熱中するだろう。教師が眼鏡帳に書き込む成績に恐れおののく光景もでてくるだろう。帝国明治期のある時期には、帝国大学法科時代の成績によって俸給の額に差があった例がある。

知的コミューン

それならば、どうしたら大学を若者にとってもっと面白い所にすることができるのであろうか。どうしたら勉強をもっとやりがいのあるものにすることができるのであろうか。「自動車学校」が目指したように、無理やり若者に勉強を課しても効果はない。強要的に何かを覚えさせようとしても意味がない。そうだとしたら、若者が自分で夢中になれることを与え、その中に学問を没頭させればよい。そのためには何か学生自身が興味をもったことを、自分で研究するようにすればよい。つまりどうせ勉強させるとしたならば、もっと面白いことを、学生が進んで夢中になることをやらせた方がよい。こうした考え方の中から登場したのが、「研究大学」という構想である。

この「研究大学」の具体的な姿は、第3章で述べておいたが、そこでの教師と学生との関係は「自動車学校」とはかなり異なっている。「研究大学」では教師も学生もともに学問上の新発見を目指して、研究を進めるという点で同列であった。教師は意欲だけが学生を相手に、無理やり知識を注入し、試験でもって学生を脅かす「調教師」ではなかった。「研究大学」の教師とは学生の目からみれば、同じ目標に向かって歩いている「先輩」だったといってよい。つまり「研究大学」とは、同じ目標を抱く教師、学生で作られた「知的コミューン」だったのである。この「知的コミューン」では学生は試験に脅かされながら勉強するのではない。出世につられて勉強するのでもなければ、就職のために勉強するのでもない。自分の知的好奇心のおもむくまま、教師と肩を並べながら、未知の知識を求めて、勉強し、同時に研究を進めるのである。一点ぶけて没頭してゆく教師を見習い、学生もまた学問上の新発見を目指して研究に没頭してゆく。そこでは教師も学生も一体となることができる。教師の目指す目標も学生の目指す目標もともに同じだったからである。

しかしこのような「知的コミューン」がすべての学生にとって思い地のよいものだったわけではない。大学とは研究の場である、学生もまた自分が興味をもっているテーマを「研究」せよ、といわれても、すべての学生にとって、そうした「研究」が楽しみであったわけではない。そうしたことに興味を発見できた者、青春のエネルギーを投ずるだけの価値があると信じることのできた者は、けっして多くはなかった。

それでは残りの学生はどうしたのか。彼らを待っていたものは「知的コミューン」の中の孤独である。もっとはっきりいえば、彼らはこのコミューンの中では無視された。教師とも同じように、朝から晩まで図書館に閉じ籠もり切り、実験室にはいり切り、こうしたライフスタイルを自分から選ぼうとしている学生にとっては、「知的コミューン」は「自動車学校」より、はるかに住み心地がよかったことであろう。自分の中側からわき出す知的好奇心にかられ、母大な先達の指導を受けながら、未知の世界をめがけてトンネル状態で突っ走ってゆくことは、教師のジャレまでノートに書き込まねばならない「自動車学校」での学生生活にくらべれば、はるかに刺激的だったはずである。しかしそれはあくまでも一部の学生、それもしかしたら、ごく少数の特異なパーソナリティの持主だけに通用することで、多くの学生にとっては、けっして魅力的な生き方ではなかった。

考えてみれば、「研究」という活動はニゴイスティックな活動である。まるで獲物を追い求める猟犬のように、他のものには一切目もくれず、一点めがけて没頭してゆくのが、「研究」というものの具体的な姿である。くる日もくる日も文献と実験データとにらめっこ、それでもなおいつまでたっても、それでもなおいつまでたっても、自分のエネルギーと時間を投入し、既成の理論をくつがえし、既成の理論を破壊し、そうすればやがては未知の世界が開けてくる、そういうカケにスリルを感じる者でなければ、「研究」などに興味を発見することはできない。それはおそらく、もともと知的好奇心と敏捷本能とが紙一重であるためであろう。知的好奇心とは、かぶとむしの体内にどんなセンマイがしかけられているのかと、そのからだを引きちぎってしまう少年の破壊本能と、たいして違わない。「知的コミューン」とは、こうしたかなり特異なパーソナリティの持主のすみかであった。

予言共同体

このように「知的コミューン」は一つのことを執拗に追い求める研究者に興味をもった者には絶好の寝ぐらであったが、そうでない青年には居心地のよいすみかではなかった。彼らにとって大学とは血わき肉躍る刺激を欠いた無味乾燥な場所でしかなかったところから、そんなキャンパスの中にあって彼らの心を癒したのは、猛烈なかたちで思想を語り、イデオロギーを告げる予言者的教授の教室であった。予言者教授が学生に語ったことは、「自動車学校」の調教師のようなこまごまとした断片的な知識ではない。また「知的コミューン」の教師のように、説かられたあげくそんな小さなテーマに執念深くしがみつかねばならないのか、理解できないような「研究」でもなかった。何か生きる目標を求め、何か青春の情熱を燃やさせられる対象を求めて、大学へやってきた多くの学生にむかって、予言者教授は一つの目標を提示することができた。このように「自動車学校」は青年のエネルギーをあいつぐ試験の中に吸収しようとし、「知的コミューン」は「研究」の中に彼らのエネルギーを吸収しようとしたが、「予言共同体」は若者のエネルギーを「新たなる生」に向けての運動の中に吸収しようとした。

トライチュケの講義がどれだけ多くの学生の熱狂的支持を受けたか、第4章で述べた通りである。トライチュケの講義を聞いた学生たちは、教室内だけの孤立感にとどまらず、学生運動となり、青年運動となって、キャンパスの中に、そして街頭へと流れだしていった。その学生の一人はいった。「今やわれわれは新たなる人生の目標をつかんだ。今やキャンパスはこの新しい思想のもとに、よみがえらなければならない」。そこでは教師も学生も一体となることができた。もはや学生は試験のために勉強するのではない。また「研究」のために、図書館、実験室に一日中閉じ込もり、文献、データとにらめっこの生活を強制されるのでもない。今や歴史の流れを変え、無味乾燥なキャンパスを再生する運動の担い手となって、自ら苦悩する場を提供したのである。

生きるべき目標を求める青年にとって「自動車学校」は、あまりにも無味乾燥な無謀の学問を強制しすぎた。「知的コミューン」はあまりにも博識なライフスタイルを学生に求めすぎた。それに引きかえ、予言者教授は青年の内面に眠っている情念に、直接呼びかける魅力をそなえていた。

トライチュケの説くドイツ・ナショナリズムがあまたの青年を第一次世界大戦にかりたてたことはいうまでもない。またナチズムに共鳴する教授たちの思想が、どれほど多くの青年の心を浚捕したか、それも改めて説くまでもない。キャンパスはつねに新しい予言者を作りだしてきた。それはキャンパスとはとかもなおさず、いつの時代にあっても「新しい生きるべき目標」を求めてあまたの青年が集まってくる場だからである。

これまでわれわれは「自動車学校」、「知的コミューン」、「予言共同体」という三つの形をみてきたが、これはどの時代のどの大学がどのタイプに属するか、それを分類するために取りだしてきたのではない。いかなる社会にあっても、いかなる時代にあっても、大学のキャンパスの中にはこの三つのタイプがたがいに共鳴を誘じてきた。この現代にあっても、そのことには変わりはない。おそらくこれからも同じであろう。ここから大学とは何をするところなのか、教師とはいかなるものなのか、学生とはいかなるものなのか、という問題が始まる。それとともに「学ぶ」とはどういうことなのか、「教える」とはどういうことなのか、そういう問題が始まることになる。「学びとは真理(まこと)を胸に刻むこと、教えとは希望をひと言語ること」という美しい言葉がある。何をどうやって語ったら希望を伝えることができるのか。これまでの歴史は真理(まこと)を胸に刻みつけることができるのか、これまでの歴史はその苦悩の歴史であった。この歴史の中から何を学びひとることができるのか、このことを自分の胸にむかって問うことの中から、新しい歴史が始まることになる。